

## 身近な植物、タンポポを観察する

櫻井幸枝・朱雁

### 1. 経緯

平成19年4月11日、新潟市(旧新津市)金津、お茶山山麓の畦道にて採集されたタンポポ(sp)を新津植物資料室にて観察する機会を得たが、その様子を報告する。

このタンポポは、在来種と外来種を見分ける際のポイントとされる「外総苞片」が直立している。この特徴からは在来種の「エゾタンポポ」のようである(写真1・写真2)が、葉の切れ込みがかなり深い(写真3)点など、エゾタンポポらしくない形態を示す部分もある。変わったタンポポがあると、昨シーズンから気にしていたものを、この日掘り起こしてきた、というものである。

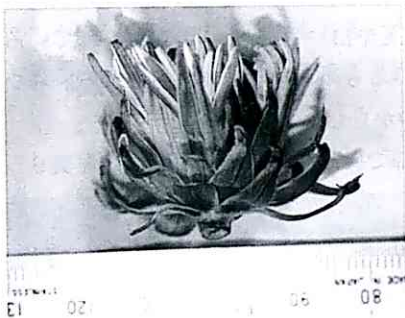


写真1. 花の形態1

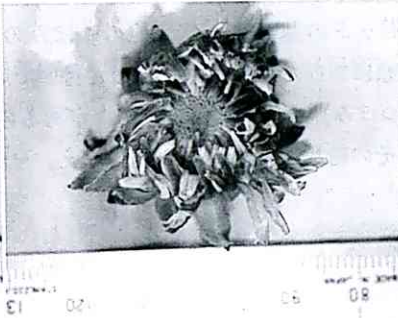


写真2. 花の形態2

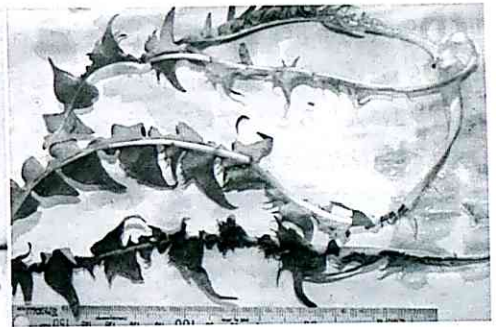


写真3. 細かく切れ込む葉

### 2. 形態

根もとを掘り起こして採取してきた2株は、どちらもかなり大きいもので、小さい方の一株は根を割って2つに分けてから新聞紙にはさみ、押し葉にした。もう一株は、掘りあげた状態で見ていたためなのか、普通のタンポポがいくつも集まっているかのような、見たこともないサイズで巨大と呼びたいような株。根元はいくつものロゼット状の葉の集まり(これよりロゼットする)が込み合い、まるでレタスか何かのよう。特に測らなかったが葉の根元の集まりが径10cmか、15cmあるかというくらいであったから、どうやっても新聞紙に入りきらず、押し葉を断念した。葉は、後で洗ってばらばらにした際、両手を合わせてもあふれるくらいの量があった(写真4)。そして根は、タンポポの根とは思えない複雑な形状をしていた。タンポポといえば、図鑑の写真に出ているような、直根が1m近くになる姿を想像していたが、あれは柔らかい地面に生えるなどの条件でよほど素直に伸びた場合の姿のようだ。硬い地面に生えるタンポポの根はあのように伸びないらしい。それにしてもこのタンポポの根は、中央に太めの根がある周りに、何本もの根が絡み合い(写真5)、所々ごつごつとこぶ状にふくらんでいる。さらにこぶ状の部分からは複数の小さい芽が無性的に発生しており(写真6)、成長すれば他と同じロゼット状の姿になり、ここにも花をつけるのだらうと思われる姿であった。その部分だけを見れば、まるでイモカタバミのイモと芽生えを小さくしたかのような姿だったのである。

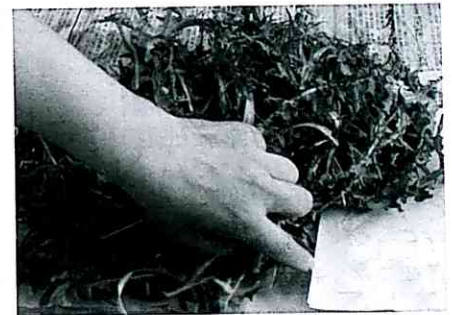


写真4. 大量の葉



写真6. 根からクローンを発生

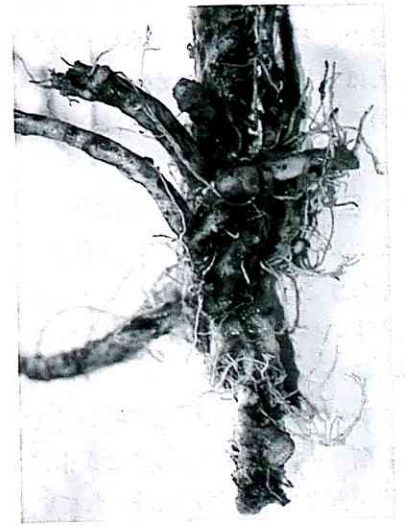


写真5. からみあう根



### 3. 頭花の総数を数える

あまりの大きさに押し葉標本づくりは断念せざるを得なかったが、せっかく苦勞して掘りあげたものをそのまま腐らすのではもったいない。早々に興味を失ってしまい「いらぬ」と言い出した1名を除き、残りの2名で何とかできないかと相談した結果、地面から上の部分は食用に利用し、根はもう一度植えて後々観察したらどうか、という話に落ち着いた。

食べるためには、分解してよく洗わなくては行けない。ロゼットごとに分けられ、次々洗われていくのを見ていて、緑色のコロコロした頭花(つぼみ)に目が行った。ロゼット1つに複数付いてひしめいている。洗うために分けられていても元は一株だったこのタンポポは、頭花の総数がいくつあるのだろうか? せっかくの材料である、頭花を取り出し、その総数を数えることになった。

頭花は、開花直前の姿をした1つを除きつぼみの状態である。その大小や状態にはかまわず、ともかく頭花(つぼみ)と確認できるものすべてを取り出した。ロゼット一つに多いもので8個程度の頭花のつぼみが、大小さまざまに付いて、ロゼットの基部はかなり込み入っている(写真7)。根元をかき分け、まだクリーム色をした径1cmに満たないつぼみまですべて取り出した。小さいつぼみはロゼットの基部にあり、他のつぼみの茎や白い毛に埋もれてかくれている(写真8)。この白い毛は、開花・結実する状態に伸びた花茎にちらほらと付いているものと同じものと思われる。ちなみに、口に入れるともものすごく苦い。頭花(つぼみ)を保護する役割などがあるのかもしれない。

そして頭花の数かというと、並べて数えて、その総数はまさかの100個を超え、全部で117個の頭花を確認した(写真9)。

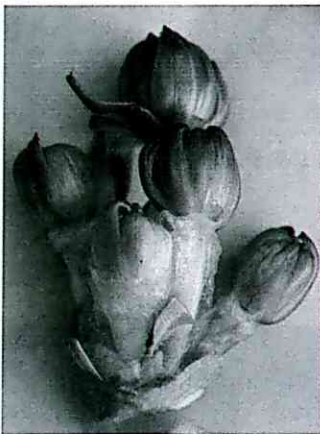


写真7. 込み入った根元と頭花

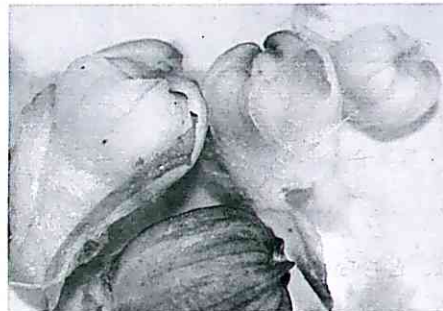


写真8. 径1cmに満たないものも

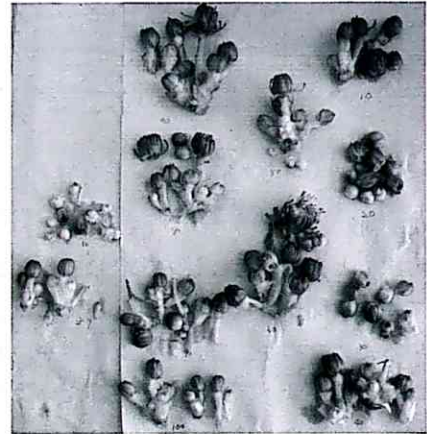


写真9. 数えました、117個

### 4. タンポポを試食する

ところで、セイヨウタンポポはもともと食用に移入、栽培されたという話があり、葉や花を食べることが出来る。葉はサラダ、花はてんぷらなどに利用できる。葉には苦味があるというが食べられないほどではなく、実際口に入れ噛んでいると後味が少し苦い程度であった。しかし苦味には個体差があるのか、別に採集してきた花茎を茹でたものを口にすると、ほとんど苦味がないものと、苦くて口に入れておけないものなど、さまざまであった。

また、セイヨウタンポポは花の香りが強いのだという意見も出たが、別に採集してきたセイヨウタンポポの花には、それほど強い香りは無かった。頭花の開花状況により変化があるのか、それとも摘んでしまうと弱くなるのだろうか、花の香りからは種類の違いは分からなかった。

### 5. 巨大タンポポの正体は?

それにしても、この株の大きさ、100個を越すつぼみ、根の込み入り具合と根から発生したクローンでの栄養繁殖、増殖のすさまじい勢いやパワーが感じられる。結局この株については、総苞片の形態からは在来のエゾタンポポだが、どうも納得できず同定は出来ないままとなったのだが、そこには近年指摘されているタンポポの形態による同定の難しさも関わっている。

タンポポは一般に外総苞片が直立するか反り返るかで在来種と外来種を見分けられることになっているが、これによる判断が困難な例があることが指摘されている(小川、2001)。セイヨウタンポポの原産地とされるヨーロッパに外総苞片が直立する種類が記載されていることや、在来種と外来種の間を生じる雑種の問題によるものである。またセイヨウタンポポは無融合生殖を行う倍数体種であるが、在来のタンポポと交雑しその遺伝的特性を取り込んでいるという。

交雑は頻繁におこり、交雑で生じた雑種性タンポポは、在来のタンポポの分布域にまで広がっていると言われる（渡邊ほか、2007）。今まで在来のタンポポがあった場所にも、いつの間にか雑種性タンポポが生えている、しかも在来種と外来種の間のような形態を示すものであれば、外総苞片の形態では外来種と判断できない・・・という状況が考えられるのである。

ここからは推測だが、今回観察した株、これが「雑種性セイヨウタンポポ」である可能性はないだろうか。それとも、山際の畦道のような場所は農薬や除草剤などの薬品、定期的な除草などの影響にさらされるため、これらの薬剤などの影響で突然変異を起こした特殊な形態の可能性もある。

異様ともいえる姿を見た後であり想像はふくらむばかりである（写真10）。



写真10. 全体写真

## 6. おわりに

タンポポをこのようにして観察したのは初めての機会であるから、このような形態を持つタンポポの種類は何であるか、もしくは何かの影響で変わってしまったものなのか、ということに、ここで結論を出すことは出来ない。単に注目していないから気がつかないだけで、タンポポには普通に見られる形態、という可能性もある。セイヨウタンポポや雑種性タンポポ、エゾタンポポについて、今後も様々な角度から観察を継続したい。

頭花を取り出して数えて、葉は食べるために洗って（まだ試食していない）、残った根は植えて様子を見ることになった。うまく根が定着すれば生態の観察も出来る。特に、一年間に何個頭花が付くのかという点や、根の形状やクローン形成が起こるかという点は、興味がわくところである。

タンポポのように、ありふれた植物と思って見逃している現象が周囲にどれほど存在するのか、改めて実感する貴重な体験となり、勉強になりました。

## 7. 参考文献：

- ・「日本の野生植物 合弁」 平凡社 1981年
- ・「日本のタンポポとセイヨウタンポポ」 小川潔著 どうぶつ社 2001年
- ・「雑草博士入門」 岩瀬徹・川名興著 全国農村教育協会 2001年
- ・「雑種性タンポポの遺伝的多様性（日本植物分類学会第6回大会研究発表要旨集）」 渡邊幹男ほか 2007年